

沖縄戦の後遺症とトラウマ的記憶

The Battle of Okinawa and Its Traumatic Aftermath

【司会】名嘉幸一（琉球大学）

【討論者】宮地尚子（一橋大学）

【報告者】北村毅（早稲田大学琉球・沖縄研究所）、當山富士子（沖縄県立看護大学）、宮城晴美（琉球大学）、上原立人（タカハシクリニック）、謝花直美（沖縄タイムス）

■各報告タイトル

1. 沖縄戦の記憶と精神障がい（北村毅）
2. 沖縄本島南部 A 村における沖縄戦の爪痕（當山富士子）
3. 「集団自決」の傷あと（宮城晴美）
4. 沖縄戦後の精神障がい者と私宅監置について（上原立人）
5. 沖縄戦・語られない言葉（謝花直美）

■概要

近年、沖縄県では、精神的疾病、性暴力、家族内暴力、学校内暴力、自殺などが全国でもトップレベルで発現していることが各種調査報告によって明らかになっている。

これらの問題の背景に、沖縄戦ならびに長期間にわたる米軍基地のプレゼンスなどの沖縄の特殊な歴史的・社会的背景があることが考えられるが、その関連を明らかにすることを目的とした学術的検討が十分になされてきたとはいえない。

アジア太平洋戦争末期に日米両軍の地上戦が展開され、多くの一般住民が巻き込まれた沖縄戦から 67 年。その被害の甚大さは、物質的被害（戦死者・戦傷病者、生活インフラや行政機構の壊滅など）において指摘されてきたが、精神的被害については文学作品などの中で扱われるぐらいであった。

さらに沖縄には、沖縄戦による精神的被害を過去のものとしめない特殊な状況がある。すなわち米軍基地の存在であるが、それは戦後長きにわたり県民の至近に存在しつづけ、犯罪や暴力の温床として生活を脅かしつづけてきた。

本パネルは、沖縄戦の心的後遺症が精神医療や精神保健の分野においてどのように扱われ、そのトラウマ的記憶が戦後沖縄の社会病理（家族や社会内に蔓延する暴力）や精神病理（精神疾患、依存症など）とどう関わっているかを、沖縄戦から現在へといたる歴史的な幅の中で再検討することを目的としている。

本パネルには、研究者だけでなく、これまで当該問題に実践的に取り組んできた精神科医、保健師、ソーシャルワーカー、ジャーナリストなどの多彩なメンバーが集う。当日は、戦時下における精神障がい者の扱われ方、保健師の活動の中で捉えられた沖縄戦のトラウマ的記憶、1966 年に実施された精神衛生実態調査をめぐる問題、戦後における精神障がい者の私宅監置、戦争体験が個人・家族・コミュニティに与えた影響などの具体的事例の報告を経た後、全体討論で沖縄戦の心理的影響や精神的被害について議論を深めたいと考えている。